

大地に刻まれた西会津の足跡 地形からみた西会津の歴史 その3

一下野尻宿一

文：田崎 敬修

新潟平野の中を悠々と流れている阿賀野川をさかのぼるとすぐに山岳地帯に入り、どこまで山道が続くのかと思った時、眼下に平地が現れました。野沢盆地最北端の下野尻です。下野尻は新潟の方から来ると山道から解放されホッとする場所で、野沢の方から来るとここから山道だと気合を入れる場所であったことには今も昔も変わらないのです。

下野尻宿ができた年代は車峠に接続していることから二瓶七左衛門（安座の肝煎で林業の統率者）が鶴ヶ城改修のため車峠を開削した後ということになり、諸説ありますが、加藤明成が鶴ヶ城の改修を開始した1639年（寛永16年）より少し後と考えていいでしょう。各地に点在していた村々を集め宿場を作るため適地を探すと宿場に必要なる水路にちょうどよい小川が車峠の山裾から流れている場所がありました。

下野尻の地形面は阿賀川によって作られた段丘面でしたが各所で西側の山地から流れて下った小川によって浸食されており、この場所も南側が曲線的に浸食され小さい崖になっていたのですが町割りをしました。そのため町割りは長方形にならず紡錘形のような形になっています。クランクは根柢神社南とあまり明確ではありませんが旧群岡小学校下のところにあります。

一見水田に適地のような低平な地形が広がっているのが段丘ですが、水がないため山地に堤を作り水を引かなければなりません。堤は作られた順に惣蔵沢堤（1706年）^{そうぞうさわづつみ}・琵琶沢堤（1735年）^{びわのさわづつみ}・新堤（1830年）^{しんづつみ}と年代不詳の坂下堤^{さかしたづつみ}があります。九日田堤（1716～36年）^{くにちだづつみ}というのもあったそうですが現在は水田になっているそうです。これらの堤は今でも下野尻地区の水田耕作には必要不可欠な水を供給しているのです。

阿賀川の舟運が始まると当初、大下野尻近くの川湊で荷物の積み下ろしが行われ下野尻地区は陸運と合わせて大変な繁栄でした。大槻太郎左衛門の乱（『にしあいづ物語 その74』）で太郎左衛門に味方し敗れた小島村の地頭成田氏の一族が大下野尻に逃れ、後に眼医者になったということと、芦名氏の家臣で伊達政宗との戦いに敗れ民間に身を隠していた満田氏の子孫が下野尻村の肝煎になっていることから下野尻には敗者を受け入れる寛容な気風があったのでしょうか。



▲国土地理院発行 1/2.5万地形図
「野沢・徳沢」 拡大・着色



こちらを警戒する様子もなくのんびり草をムシャムシャ。その姿はとても可愛らしく、ほっこりと癒されるひとときでした。（三留）

ある日の昼休みのこと。上司の「シャッターチャンスだよ！」との声に誘われ役場庁舎の裏が見える廊下に行くと、そこにはイノシシのような動物が。よーく見てみるとなんとカモシカでした！



編集後記

今月は、6月1日に行われた大山まつりのオープニングセレモニーから。
“3年続けてお参りすればなじみの願いも聞きなされる”と町内外から多くの皆さんが訪れ賑わいました。

今月の表紙